

大陸（北支）

北支の戦闘

戦傷の苦勞を

夫婦で乗り越え

岩手県 上澤 正一

私は大正九（一九二〇）年、岩手県遠野市で生まれ、昭和十六（一九四一）年四月十日、教育召集により、弘前の歩兵第五十二連隊歩兵砲中隊に入隊し、同年七月十一日、召集解除となりました。

当時は既に支那事変も長い年月継続し、自分の友人等も、昭和十五年徴集兵として各隊に入隊し、一部の人は、中国の戦線で戦っていましたので、同年輩の

私にもいつの日か、召集令状が来るのではないかと思っていました。

弘前の師団は昔からの古い師団でありましたが、私の入隊した連隊は、歩兵第三十一連隊ではなく、歩兵第五十二連隊でありました。このまま外地へ行くのかと、初年兵教育の時には心配に思っていたのですが、七月十一日に召集解除となり家へ帰ることができました。

私は昭和十五年の徴兵検査では現役ではなく、第一補充兵になったのです。昭和十六年一月に結婚し、家庭を持ってからの教育召集でしたから、約三カ月で解除になり、家業に精を出していました。しかし、同年十二月八日、大東亜戦争勃発、連戦連勝に心も浮き立っていたのですが、私にとってもいよいよ来るべき

もの、再度の召集ですが、今度は臨時召集令状を受けました。

家の方は、父も地域の役職をしていたり、家業も農業の他に商売しているという環境でしたので、一応、後顧の憂いなく、昭和十七年四月八日、歩兵第五十二連隊補充隊に入隊し、独立歩兵第一一八大隊歩兵砲中隊に入隊と決定いたしました。

出征当時の朝、先祖の仏前に武運の長久を祈願し、家内みんなの、特に妊娠中の妻の健康を祈り、歓送する村の人達に感謝をしながら家を出ましたが、その時、九十歳の祖母が縁側に座り「気をつけて行ってこいよ」と、涙をかくして励ましてくれたことは、その後何時も頭から離れることはありませんでした。あの時の祖母の気持ち、孫の私の生還を心から祈ったの言葉でありましたでしょう。

同年四月二十六日、宇品港を出帆、中国大陸に上陸、任地、北支那山西省に列車で向かい「洪洞」「臨汾」下車、同方面の警備につきましました。初めて見る大陸の風景、風俗に接しながら、四囲の敵を警戒しつ

つ、初めての戦地勤務だったので、緊張の日々でありました。

北支那は、蒋介石の正規軍ばかりでなく、共産八路軍も多く、警備、討伐と、住民との融和という日々を過ごしながら、やがて戦地生活、勤務に慣れてきましたが、決して心をゆるめることのできない日々でもありました。

次に、戦争の過酷さ、行軍の苦しさ、一歩間違えば死につながった、私の行軍体験を記してみます。

昭和十八年頃から、山西省も激しい戦闘が続いて、夏の炎天下の強行軍の毎日でした。水筒の水も飲みきり、全身は汗で衣服、皮膚まで塩で真っ白くなる、連日の行軍でした。

同年八月、古見鎮付近の戦闘で、私は部隊本部の大行^{こうり}李班で、食料、弾薬を中国馬に駄載し、最後尾の看守の任務についていました。中国人に馬の手綱を引かせ、草木のない山々、深い谷間を炎天下の行軍続き、時々敵の攻撃があり、銃火を浴びても待避する場所も

なく、撃ち合いも幾度か、今日で最期か、明日かとの思いが全身をかけめぐり、特に夜の行軍が多く苦しい任務でした。

夜、十一時を過ぎた頃、部隊から小休止の命令があり、馬の手綱を足に巻きつけて休みました。

出発時は起こしてくれと、中国人の馬夫に言いましたのに、馬夫は手綱を解いて出発してしまつたのです。連日の疲労で死んだように眠り込んでしまい、目を覚ましたときは何時間たつたのか、馬も行李の姿もなく、闇夜の中にただ茫然として立ちすくみました。

目の前は真っ暗闇、神仏にも祈る気さえなく、さまざましながら味方を捜し歩き、時には敵兵と撃ち合い、夜も更け月の明かりで川岸伝いに歩き続けました。足の感覚もなくなり、心身ともに疲れ、死を覚悟して死に場所にと段々畑の洞窟の中に入ったが、空腹と疲労で前後不覚にも眠ってしまい、目が覚めたときは朝でした。

これまでのことは夢であつて欲しい、夢なら早く覚めて洞窟の中で手を合わせて祈り、自決か死は覚悟

しているものの、我が身の情けなさに初めて涙が出てきました。故郷を出たときから、今までのことが次々と思い出されて、妻やまだ見ぬ我が子、父母、兄妹、歎呼の声で送ってくれた村の人達が、頭の中に交差し、生きることを決意する。何とか味方に追いつくようにと、一心に神仏に祈りました。

出征した時に、千人針の胸巻きに入れてきたお守りを取り出して見ると、福泉寺からの身代わり不動様のお守りの木札が真二つに割れていたので、一縷の望みを持ち、気を取り直して近くの部落に入り「日本兵を見なかったか」と聞きました。すると「案内する」と外に出て、急に何事か叫んで部落の中に逃げ込んで行きましたので危険を感じ、急いで部落を離れ次の部落に入り、様子を見ながら民家を訪ねたら、運良く人のよさそうな農民が朝食の支度をしていて粟粥をくれました。

熱いので水筒に入れ、厚く札を言って部落を後にし、水筒の粟粥を飲みながら我が身でないような足をひきずりながら真夏の炎天下、運命を天に任せて死に

場所を求めて歩いてみると、前方遠くに軍隊の隊列が見えたので、近づいて日本軍に間違いはない、と分かったときには、これは夢か幻か、神仏のご加護にただ涙が溢れるのみでした。前夜の我が身の不覚が、悔やまれて、戦場の厳しさが現実であることが身にしみました。

部隊は行軍中の小休止で、機関銃中隊の最後尾に着き、「上澤は生きています。申し訳ありませんでした」と報告すると、「よく生きていた」と励ます者、「しっかりしろ、元氣を出せ」等叱咤する者等、ようやく生きている現実をかみしめました。

昭和十九年八月六日、山西省稷山県西蔭村付近の戦闘において、迫撃砲弾、機関銃を右上腕部に受傷して、第六十九師団野戦病院に入院、ガス瘻疽を併発し右上腕部を切断しました。同年八月二十三日、河津患者療養所、第十四野戦病院に転入。同年九月十三日、運城陸軍病院に転入。同年十月六日、大原陸軍病院転入。同年十月二十九日、北京第二陸軍病院転入。同年十一月二十八日、朝鮮臨時兵站病院分院転入。同年十

二月二日、釜山港出航、博多港上陸、広島第三陸軍病院転入、同年十二月二十八日、臨時東京第三病院に転入して機能回復訓練が始まりました。

腕切断面は治癒したのに、神経から来る違和感でどうにもならず、また補装具（義手）を付けても、意のままにならず、非常に苦しい毎日で、社会復帰訓練においても苦闘の連続でした。昭和二十年七月二十九日付、兵役免除となりました。

昭和二十年八月十日、衛生兵付き添いのもと帰郷しました。再び帰ることがないだろうと覚悟して出た故郷へ、白衣ながらも命ながらえて帰って来た私の心境は、誠に複雑でした。家族はもとより、村の人達は心から暖かく迎えてくれました。

昭和二十年八月十五日終戦となり、私の社会人としての人生が始まりました。

生家は農家で、家族は祖父母、両親、叔父夫婦、兄弟、妹等家族十一人の大家族でしたので、妻は幼い子供を抱え、右腕のない私をかばい必死に働いてくれたことには、本当に頭の下がる思いでいっぱいでした。

た。

昭和二十二年、生家から少しの田畑をもらい分家になりましたが、私には人並みの農作業ができるはずもないので、衣類などの行商をし、妻は農作業の傍ら日用品など雑貨類の小さい店で、小売を始めるなどの基礎作りに懸命に働きました。季節の変わり目や梅雨時には、腕切断後の幻の痛みに悩まされながら、妻と共に励まし合い、言葉にならない苦労の毎日でした。

昭和二十五年五月、流行性感冒で、二男（五歳）、長女（二歳）を一週間のうちに亡くしたことは、私達夫婦にとっては最大の痛恨窮まりないことであり、生きて行く望みも、失いかける出来事でした。

昭和三十九年頃より傷病恩給等に助けられて豆腐製造業を始めましたが、朝早い（三時頃起床）仕事で、片腕のない私は結局、妻に頼ることになり、妻の苦労はそれは大変なものでした。冬季は氷豆腐を作り、釜石方面まで行商をしながら子供たちを育てました。

平成三（一九九一）年五月には、腕の切断部の痛みに耐えかねて国立花巻病院で神経の手術をして、三カ

月入院治療に努めましたが痛みが取れず、さらに四月一月岩手医大病院麻酔科に入院していろいろの治療を試みましたが、完全治癒は無理とのこと、一カ月余で退院しました。

その間、戦中戦後、大変お世話になった皆さんに報いるためにもと、身体障害者の事務局を四十年間、民生委員等十指に余る委員、会長を務め、皆さまへのせめてもの、ご恩返しと現在に至っております。

今思えば、あの東京第三陸軍病院で苦痛に耐えながら機能訓練に励んだ結果が曲がりなりにも皆さんの役に立つことになりました。年とともに五十歳頃からは、義手の使用もままならず、左手で事務的なことをしておりますが、歳月がたち私も八十歳、上腕切断の後遺症の神経痛が、日常苦痛となっています。妻も七十六歳、足腰の痛みに耐えて、私の片腕となり働いています。戦場へ行き、戦後の苦難の道を乗り越え生還できたことは、生涯を通して忘れえざるものであります。

戦禍の跡は、既に祖国の平和の中に埋没されましたが、折にふれ時がたつにつけ、あの野戦当時の苦難耐乏の時を乗り越えてきたことが胸にせまり、今はただ命の尊さをかみしめています。

軍隊の歩兵の本業は、射撃・銃剣術と行軍であることを、身をもって体験しました。広大な戦場での行軍で万一、部隊と離れたり行軍で落後したら、その人は恐らく敵兵のみならず敵に通じる住民に殺されてしまったでしょう。

ですから、部隊と離れての行動は死に等しいのであります。本文にも書きましたように、私は疲労のため、不覚にも休憩時に熟睡し、部隊と離れ、知らぬうちに落後して、名譽の戦死ならぬ行方不明の死という、死んでも死にきれぬ不名譽の死の汚名を受けるところでありました。今でもあの時のことを考えると、良くぞ部隊に追いつけたと、その幸運を感謝いたしているところであります。

負傷をし、その苦痛、戦後の現在に至るも後遺症に苦しんでいることは、私達夫婦にとって背負わねばな

らぬ不運ではありませんが、妻をはじめ、家族の力と理解により、今日を生きられたことは感謝に耐えぬと、日々心に銘じております。戦闘で戦死した先輩や戦友には、戦後の幸福や可能性はありませんでした。残された貴重な人生を、世の為に尽くしたいと思う日々であります。

【解 説】

体験記執筆の上澤正一氏所屬の第六十九師団（勝第二三五六部隊）は、歩兵第五十九旅団及び独立歩兵第六十旅団を基幹として、昭和十七年三月編成された。

独立歩兵第五十九旅団は、独立歩兵第八十二大隊・第八十三・第八十四・第八十五・第八十六大隊で編成され、中華民国山西省、汾陽（山西省中部、龍門江沿岸）に位置し、警備、治安確保に任じていた。

独立歩兵第六十旅団の所屬部隊は、独立歩兵第一百八・第一百九・第二十大隊及び、通信隊・工兵隊・輜重隊・野戦病院・病馬廠で、内地弘前において編成し、師団司令部を山西省臨汾に位置し、冀察地区（河

北・察吩爾(チャハル)の警備治安確保に任じた。

この間、对晉(山西省)汾陽(山西省中部、太原西南方)東南方地区作戦並びに十八春大行及び、十八秋大岳地区作戦に参加した。

初代師団長は陸軍中将 井上貞衛、二代師団長陸軍中将 三浦忠次郎であり、昭和十九年二月、編成改正に着手し師団より兵力を抽出し、同年三月独立歩兵第三旅団の編成を完結し、該部隊と冀察地区の警備を譲し、第三十七師団(冬兵団―湘桂作戦に参加し、以後、仏領インドシナより南方軍に移る)の転出に伴い、山西省同東地区の警備を交代継承す。

師団司令部は運城(山西省南部蒲州東方)に位置す。昭和十九年四月、軍令により師団迫撃砲隊増加編成す。同年五月より西北河南作戦に参加す。(上澤氏の戦傷は同年八月山西省稷山県とある)。

上澤氏所屬、独立歩兵第百十八大隊は、歩兵第六十旅団隷下であるので、同旅団の軍歴の概略は次である。

昭和十八年

一月 萬安鎮西方第四十八師団作戦参加

三月 第三十七師団協力作戦参加

四月～五月 十八春大行作戦参加(大行山脈一帯)

九月二日～七日 南部瞿山討伐に参加

九月八日～二十一日 汾城西方対山西軍作戦参加

九月二十二日～十一月二十日 十八秋大岳地区作

戦参加

昭和十九年

三月二日 山西省聞喜県横水鎮付近警備

四月九日 稷王山周辺地区肅正作戦参加

八月三十日～九月四日 栄河北方地区挺進縦隊撃

滅作戦参加(汾南地区山

西軍撃滅作戦参加

十月十七日 山西省聞喜地区付近警備ほか

独立歩兵第百十八大隊の略歴は次である。

昭和十七年

四月十四日 青森県弘前市において編成完結

大隊本部 一、一般中隊 五、機関銃中隊 一、
歩兵砲中隊

〔行動の概要〕

昭和十七年

四月二十四日 弘前出発

四月二十六日 宇品港出帆

五月三日～十一日 山西省洪洞着第六十九師団長

の隷下に入り同地区、洪洞・

臨汾付近の警備

十一月六日～十八年一月二十四日 沁源地区警備

一月二十五日～七月二十二日 沁水地区の警備

七月二十三日～十九年二月二十九日 洪洞安沢地

区の警備

七月六日～八月二十九日 山西省河進県、河津村

近の警備

昭和十九年

八月六日 山西省稗山県西蔭村付近の戦闘にて迫

撃砲弾、機関銃弾右上腕部受傷

昭和二十一年

一月十三日 一部内地帰還のため上海市政府に集

結、連合国による携行品検査、乗船

出発帰還人員 小田島大尉以下 五

八九人

一月十六日 L S T 第九号 佐世保港上陸

除隊、召集解除

死亡者 二三人 転属者 一九五人

独立歩兵第百十八大隊長 陸軍少佐 赤星 正太

第六十九師団第六十旅団長

初代 陸軍少将 太田 藤太郎

二代 陸軍少将 服部 直臣

三代 陸軍少将 国司 憲太郎

作戦参加状況

期 間 作 戦

昭和十七年六月四日 对晋汾城西南地区区作戦

～六月十日

六月七日 汾陽北方地区作戦

六月十七日

六月二十九日 对晋襄陵西方地区作戦

七月三日

七月十日 对晋汾陽東南地区作戦

七月二十二日

七月二十三日 对六一軍作戦

八月三日

八月十日 襄陵北方地区討伐

八月十九日

八月二十日 对山西軍作戦

八月二十七日

八月二十八日 萬安鎮西南方地区作戦

九月二日

九月一日 洪洞東方地区作戦

十月四日

九月三日 霍泉東方地区作戦

九月九日

十月二十日 沁源地区作戦

十一月十一日

十一月二十二日 浮山東方地区作戦

十一月二十三日

十一月二十四日 洪洞西方地区作山西軍

擊滅作戦

十一月二十七日

昭和十八年一月一日 萬安鎮西方对四十八師団作戦

一月四日

一月五日 洪洞西方地区对四十八師団作

戦

一月十日

四月五日 十八春太行作戦

五月二十三日

九月三十日 十八秋太岳地区作戦

十一月十五日

昭和十九年四月十日 西北河南作戦

七月五日

八月二十九日 栄河北方地区挺進隊擊滅

作戦

九月九日

九月十五日 汾南地山西軍撃滅作戦

┆十月十二日

昭和二十年二月二十七日 汾南地区二月肅清作戦

┆三月六日

五月一日 「光」号作戦準備

┆六月二十七日

この軍歴をみると、勝兵团（第六十九師団）のごとく、北支那方面での治安維持及び作戦参加していることが分かる。広範な地域で、少数の兵力で、国民政府軍（蔣介石）と共産八路军軍及び雑軍と言われる地方軍閥軍との戦闘に従事した部隊及び将兵の苦勞は大であつたことが分かる。